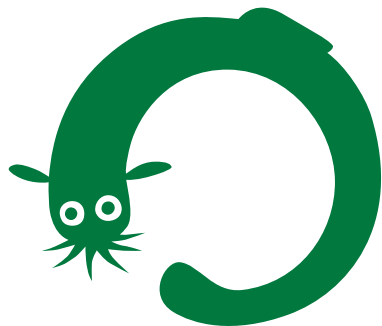


そうかわせみ、



そ  
う  
か  
わ  
せ  
み、

Vol.6



岡島弘子  
目をあわせて 2



一色真理  
月蝕 4



伊藤浩子  
縄 10



相沢正一郎  
テーブルクロスに刻印された顔 12

そうか！ 14

目をあわせて

アジサイの目はどこにあるのだろう  
目をさがし目をあわせようとする  
たくさんの目 ひとつの目  
すいてきとなって世間をぐるつと映す

私の目をさがし目をあわせる

鏡の中

過去の目未来の目 無数の目が 私を射抜く

捕獲されたペンギンの

写真の中の目をさがし 目をあわせる

充血している 日本をとびだそうとしている

ペルーまで泳いでチリまであるいて

脱走しようとしている

北半球をぐるりと半周

世界地図をぬけ この星からもにげだそうとしている

脱走からも脱走しようとしている

とおくを見すぎて みつめすぎて

結膜炎になったペンギンの目

太陽の目をさがすために

うつむいて日食メガネをつける

一礼するかたちで顔をあげる

目をあわせると金の環がかがやいている

記憶のくすりゆびに はめる

日食メガネをなげすてて

雲の切れ間の太陽の目をさがし

目をあわせようとする

答えは あの光りのむこうにあつて

答えは灼熱のほのおの中でもえていて

みようとすると私の目をいくどでも焼く

月蝕

手の話をしよう

\*

手はどこにあるか？

手は水中にある

\*

なぜ手は水の中にあるのか？

引き出しが一つ

川底に沈んでいるからだ

\*

手は引き出しをまさぐった  
けれど 開かなかつた  
鍵がかけられていたから

\*

鍵を探して  
手はアヒルといつしよに  
野川を下り さらに多摩川に出て  
海まで旅したことがある

\*

アヒルは二度と戻ってこなかつたが  
手は気がつくともう また  
谷戸橋の下にいた

---

手は指が一本欠けている

\*

手は知っていた  
引き出しの中に  
失った指が入っているのだと

\*

だから 指の話をしよう

\*

指は手が明日水の中で書く詩の  
第一行目になるはずだった

---

\*

指には唇があつた  
笑つたり  
歌つたりすると  
どす黒いものが唇から  
水の中にあふれだした

\*

野川の底から  
よく響く声が聞こえてくるのは  
そんな夜だ

\*

指には眼もあつた

---

まぶたを開けるとやはり  
どす黒いものが水の中にあふれだした

\*

見ることも  
歌うことも  
笑うことも  
指には痛くてたまらない

\*

それでも指はよく通るボーイソプラノで  
いつまでも血を流し続けた

\*

引き出しの中の指には

---

爪が欠けていた

\*

最後に爪の話をしよう  
指から力まかせに剥ぎとられた爪

\*

爪はどこにあるのか？  
水中にはない

\*

空の上で赤黒い炎に包まれて  
いま燃えつきていくところだ

縄

となりでは縄をなっていた  
だれよりもいそいで

さいしょに

右てくびをきつくくくり

順順に

左がわへとならしていく

ほてつたつちふまずと

あとからきづいた時間に

おくれないうちに

(仮想境界だったら

(いつでも忘れていられるから

顔つきあわせれば

気ままにもふるまえず

たわむ

しなう

(かわいた肌ざわりに

(頬ずりさえしそうな

中にあるものを

ぜんぶもどして からにちかくして

それでもゆえない骨を

これからゆめにみる

夜には

もういちど朝やけをまつ

額にゆれている

テーブルクロスに刻印された顔

朝、まあたらしいテーブルクロスをまえにテーブルに着くと、  
おもわず皺をのぼし、布地の感触をたしかめたくなる……それは  
眠りから醒めたあと、からだの動きの跡や汗、においを残したシ  
ーツにそつと触れ、皺をのぼす行為にちよつぴり似ている。

カーテンの吊り金具のすきまからテーブルにこぼれおちた光を  
みつけ、わたしは熱いコーヒーを飲みながら書く。〈テーブルの  
上に白い羽がおちている。朝、ひかりの鳥たちがわたしの中に  
《すべいんささげ》を置いていった。なんの花だろう……そうか、  
ほしがれいをやくふるさとのにおいや、あかるい水郷でとらえた  
鯰の味をうたつた詩人の花だ。〉

手もとを見ると、いま近くを通つたひとがわたしの耳もとにな  
にか囁いていった……とてもいうようにパン屑がこぼれ、いつし  
よに欲談していたひとが、たつたいま、テーブルクロスで顔を拭  
いて立ち去つた……とてもいうようにかすかな汚れが残っている。

時間ときに鞭打たれ、木の皮膚が色褪せたテーブルのからだには白  
布が纏わりつき、あしもとの闇に垂れ下がっている。いつか汚れ  
てしまう、このテーブルクロスだって……血と膿が滲みだした包  
帯みたいに。

今夜も、テーブルでわたしは手入れのおこたつた庭に背をむけ、  
句読点を飛石の呼吸で打つたり、形容詞や接続詞や重複したこと  
ばを雑草のように筆りつつたり、漢字やひらがなやカタカナを素  
材に石や水や木の配置に気を配つたりしながら、紙面を推敲する。  
〈ひよどり、しじゅうから、あおじろ……なんの鳥が糞につつま  
れた種をこぼしたんだろう、ツルバラが咲いた……あおぞらを漂  
流して、遠いわたしの庭に。〉

このテーブルから白布を剥ぎとって、磔刑図を描いてみたい。  
……いつのまにかテーブルのまわりから眠りが泡立ち、舟の帆を  
はらませる風や權にくだけちる水音が近づいてくる。わたしはテ  
ーブルクロスもろとも瀑布のように落ちていった。



そうか！

気がつくくと、賑やかなバスターミナルにいた。死んだ人たちは全員、ここで赤か青のバスに乗り換えるのだ。バスには二つしか行き先がない。生前に犯した罪の数だけお尻を鞭打ちされた後、もう一度別のヒトとなって生まれ変わるか、もう二度と生まれ変わることもなく、このまま死んでチリとなるかである。迷う時間はない。どちらの色のバスもすぐに発車してしまう。ぼくは最後の瞬間に気が変わり、発車寸前の青いバスに飛び乗った。既に車内は満員で、ぼくのすぐ前には大腸癌だったFくんの背中が見える。彼は白いタオル地のガウンのようなものを着ているが、けつして後ろを振り返ろうとしない。前方から「このバスは満員だ。もう一人も乗れないよ」という声上がる。けれど、ぼくは何としてもこのバスに乗りたいたいのだ。無理やり体を押し込むと、背後で自動ドアが音を立てて閉まった。

(一色)

半年ほど耳鳴りが続いている。地鳴りのような汽笛のようなぼんやりした低音、日中は生活音にかき消されていることが多いが、夜、誰もいない部屋でふと気づくと、それはもう大きくなっている、見慣れた景色は遠ざかる一方で。わたしはますます耳をすます、これはただの耳鳴りなんかじゃない、耳鳴りに似せた「なにか」なのだ。そうこうしているうちに、右耳の裏側に小さなこぶができた。まるで硬い種子みたいだ。そういえば、右側を下にして眠ると決まっていやな夢をみる。今朝は主人がその「なにか」にすり替わる夢。昨日は死んだものたちが全員よみがえる夢。どうして互いにそつとしかええないのだろうと、起きてみるとまだ夜明け前だった。薄暗い船底の倉庫のようなキッチンで息を潜める。右手の人差し指で耳に触れてみると、少し熱っぽい。左手で死者の数をかぞえている。

(伊藤)

ふしぎな詩行に出会った。(思い出も夢もあるだけ出すんだ／ト 出刃をふりかぶる)。大きな透明なリユックを背負った泥棒が脅す場面。これは嶋岡晨の詩集『終点オクシモロン』の中の「泥の拳銃」という詩の中に収められている部分である。金品でなく思い出と夢をあるだけ欲しがる。この泥棒は、もしかして詩えなくなった詩人なのではないか。夢と思い出は詩を作るうえでの貴重な材料のひとつなのだから、と。

このごろは朝起きるたび不思議なものを見る。このあいだは、地面が泣いたあとのようにびしょびしょだった。童巻か雷が襲ったあとだったのだろう。又ある日は玄関の前に翅が二枚残されていた。よく見ると、そばに頭や肢の破片もころがっている。犯人は猫かカラスか。残された涙や翅。これは詩えなくなった詩人にとっては貴重な宝だと気づいた。この詩行に出会って。

(岡島)

ランドセルをしょって、小石をけりながら、いつものように学校へ。学校なんてきらいだ。むりやり箱にとじこめられるようになってきらいだ。(いつか、おまえだつて箱にはいる)。

教室も、靴箱も、兎小屋も、靴箱も、目安箱も、百葉箱もきらいだ。きゆうくつな靴をはかされてるみたいできらいだ。音楽室の幽霊みたいな肖像写真がきらいだ。ほこりっぽい理科室の人体解剖図や、骨の標本がきらいだ。冬の校庭にキリッとひかれた白墨の直線や、夏の匂いがたちのぼる校庭からボールが打ち上げられた青空がきらいだ。枯葉の舞う冬の水のないプールがきらいだ。黒板のチョークの消しあとの白い星雲や、黒板を爪でひつかく音がきらいだ。

きょうも遅くなってしまった。学校についているにはもう、先生が出席名簿を読み上げている。……死んだひとの名前ばかり。

(相沢)

同人住所

---

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

---

そうかわせみ、Vol.6 2012年6月29日発行

頒価500円

---

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男

---